



〒099-4356  
 北海道斜里郡斜里町字岩宇別 531 番地  
 知床自然センター内  
 TEL : 0152-26-7665  
 FAX : 0152-24-2115  
 E-mail : info@shiretoko.or.jp  
 WEB : https://www.shiretoko.or.jp/



-  @ shiretokoNF
-  @ shiretoko\_NC
-  @ shiretoko\_nc
-  Shiretoko Nature Foundation



ヒグマの生態や対処法、最新情報を  
 タイムリーにお届けしています。  
<https://brownbear.shiretoko.or.jp/>



-  @ BearSafetyShiretoko
-  @ bear\_shiretoko
-  @ bear\_safety\_shiretoko

Shiretoko Nature Foundation  
**SHIRETOKO  
 BROWN  
 BEAR  
 JOURNAL** 

2025年4月発行

[企画編集] 米田紗衣・戸田実琴 [執筆] 松  
 林良太・金川晃大・米田紗衣 [印刷] 山藤  
 三陽印刷株式会社



Shiretoko Nature Foundation  
**SHIRETOKO  
 BROWN  
 BEAR  
 JOURNAL** 





## 約2,500件

この数字は、2023年の1年間に知床半島の東西に位置する二つの町で記録されたヒグマの目撃件数です。2023年は、全国各地でクマに関するニュースが連日のように取り上げられました。ここ知床も例外ではなくヒグマの大量出没が発生し、最終的に目撃件数は記録上、過去最多を更新しました。特に夏以降は、昼夜を問わず、ヒグマの目撃情報が知床財団や町役場に寄せられ、対策員や各関係機関が現場へ駆けつけるという日々が続きました。

この時のヒグマ大量出没は、決して偶然ではなく、いくつかの条件が重なった結果、起こるべくして起きたのではないかと考えられています。本誌では、その要因を探りつつ、知床のヒグマ対策の現状と課題、そしてこれからについてお伝えします。

知床半島には、約400～500頭のヒグマが生息しており（2021年時点）、世界有数のヒグマの高密度生息地とされています。ヒグマは、海と陸をつなぐ生態系の一部を担っています。また、「知床と言えばヒグマ」と言われるほど、知床国立公園

や世界自然遺産を象徴する生き物で、その存在は観光資源としても注目されています。

一方、年間100万人以上の観光客が訪れる知床では、ヒグマを観察する人々によって引き起こされる交通渋滞やヒグマに接近して撮影を行うなどの危険な行為が毎年慢性的に発生していることも長年の課題となっています。また、住宅地周辺での出没のほか、農業や漁業が営まれる地域では、農作物被害や水産加工場がヒグマに荒らされるなどの事例が毎年一定数発生しており、これもヒグマが生息する地域における現実の一つです。

こうした中、関係行政機関・地元自治体・関係団体から構成される「知床ヒグマ対策連絡会議」が立ち上げられ、ヒグマ個体群の持続的な維持と被害防止の両立を図ることを目的とした「知床半島ヒグマ管理計画」が策定されました。日々のヒグマ対策ではこの計画に基づき適正なヒグマ管理が進められています。

また、知床の世界自然遺産地域を統括する科学委員会の枠組みの中で、ヒグマワーキンググループ（以下、ヒグマWG）において科学的な視点に基づいたヒグマの保護と管理についての議論が行われています。このような体制の中、知床財団は、斜里町

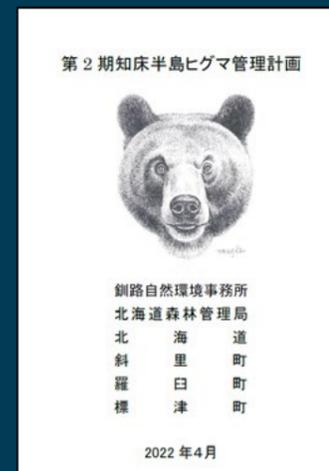
と羅臼町のヒグマ対策を両町からの委託業務として担い、20年以上にわたり現場の最前線で活動しています。



▲公園利用者提供

KEY WORD

## 知床におけるヒグマのマネジメント体制



知床半島ヒグマ管理計画



(第二種特定鳥獣管理計画の北海道ヒグマ管理計画の地域計画)



## 近年のヒグマ動向

2023年に知床半島全域でヒグマ大量出沒が発生した要因として挙げられるのがエサ不足です。夏から秋にかけてヒグマの主要なエサとなるハイマツやミズナラ（ドングリ）などの山の実りが少なかったことが原因の一つとされています。また、一部の河川では、カラフトマスやシロザケといった海から帰ってくるはずの魚も少なく、エサを求めて行動範囲を拡大したヒグマの出沒が市街地を含む各所で多発したと考えられています。さらに、知床半島に生息するヒグマの個体数自体が近年増加傾向にあったことも重なり大量出沒につながったのではないかと考えられています。

当時を振り返ると、斜里町のウトロ市街地の中心部を流れるペレケ川には比較的多くのサケやマスが戻ってきていたことから、毎日のように複数のヒグマが出沒を繰り返し、その度に目撃の通報が寄せられ対応に追われる日々が続きました。早朝から夜間にかけての出沒対応、自動撮影カメラによる24時間体制での監視、電気柵の設置範囲拡大、地域関係者による市街地内の藪の見通しを良くするための草刈りなど各種対策を講じたものの、エサ

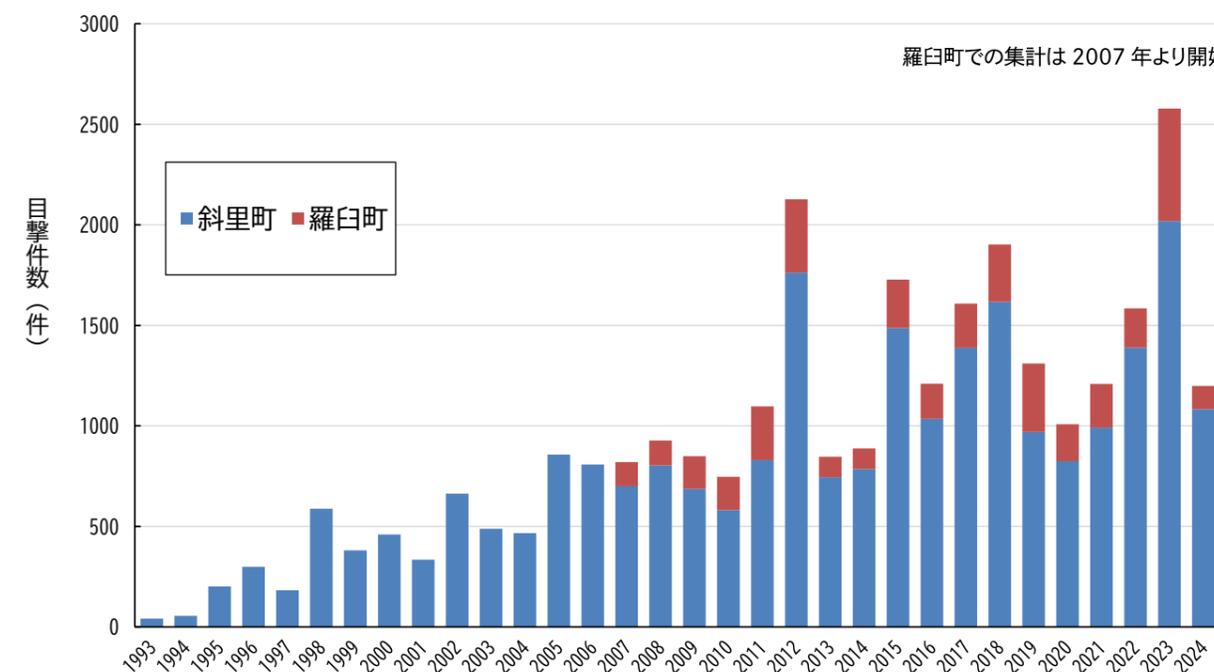
を求めて市街地へ侵入してくるヒグマを前に、対症的な対策のみでは状況は改善せず、人身事故に繋がりにかねない危険な事例も頻繁に発生しました。

また、羅臼町も同様の状況で、住宅地周辺にもたびたびヒグマが出沒し水産加工場のシャッターを壊したり、町の中心部に位置する羅臼漁港内を連夜ヒグマが徘徊する事態などが発生しました。この漁港内に出沒したヒグマは、停泊している漁船の上に残った魚を食べていたことから、味を占めて何度も漁港内に侵入したものと推察されています。

このように、市街地に入り込んだり建物を壊したヒグマは、ヒグマ管理計画のゾーニングや行動段階のフローに基づき「問題個体」とされ、捕獲の対象となります。ウトロ市街地や羅臼漁港に出沒したヒグマの多くは、最終的に有害捕獲となりました。2023年の大量出沒は、ヒグマの捕獲数にも現れており、同年、斜里町と羅臼町の2町で168頭のヒグマが捕獲されました。この捕獲数は、これまで最も多かった2012年の68頭を大きく更新し、記録上、過去最多となっています。2023年は特異な一年でしたが、それ以前も決して平穏だったわけではありません。20年前は年間数百件だった目撃件数も年を追うごとに増加し、ここ数年は1,000件を超えることが「ふつう」になりつつあるのが現実です。



最近ではドローンを使用したヒグマ対策も実施している。左はドローンに搭載したサーモカメラの画像



斜里町、羅臼町におけるヒグマ目撃件数の経年変化



最前線  
TOPIC

## ヒグマ対策

### 01 自然公園法改正

世界遺産地域内の観光利用が多い道路や利用施設では、指導啓発やルールの普及・情報発信を中心とした対策を講じることで、利用者によるヒグマへの接近や餌付け等による人身事故の発生を防止する取り組みが続けられています。知床では、国立公園の適正利用の推進と道路沿線でのヒグマとの軋轢抑制を狙いとしたバス利用を促すアクセスコントロールの試行も実施されてきました。また、環境省ならびに地域関係者の長年の努力によって、2023年には自然公園法が改正され、ヒグマへのつきまといや過度な接近を規制する内容が法律に盛り込まれるなど課題解決へ向け大きな一歩が踏み出されました。



環境省釧路自然環境事務所提供

### 02 誘引物除去

例えば、交通事故で死んだエゾシカの死体が道路上にあった場合、基本的には道路管理者が死体を回収することが原則となっています。ただし、大きな動物の死体は、ヒグマにとってまたないご馳走となるため、状況によってはヒグマを引き寄せないように、ヒグマ対策の一環として、対策員がすぐに回収することもあります。このような作業を「誘引物除去」と呼んでいます。その他、道路沿いに落ちているゴミの回収などもこの誘引物除去に当たります。



土饅頭（一度で食べきれないシカの死体などに土や草などをかぶせて隠したもの）に居付くヒグマ



### 03 とれんベア

「とれんベア」は、ヒグマにゴミを荒らされないために開発されたゴミステーション（ゴミ集積所）です。残飯などの生ゴミは、ヒグマにとって魅力的な食べ物です。もし、そんなゴミをヒグマが食べてしまった場合、味を覚えたヒグマは何度も同じ場所に戻ってくるようになってしまいます。人がヒグマの生息地域の近くで生活するためには、ゴミの管理はとても重要です。一般的な金網タイプのゴミステーションでは、ヒグマに簡単に壊されてしまうため、当財団と地元企業（シティ環境株式会社）が協力し、ヒグマに強いゴミステーション「とれんベア」を共同開発しました。



ヒグマに壊されたゴミステーションの一例



## 04 草刈り

草刈りは、地域が一体となって取り組むことのできる身近なヒグマ対策です。市街地周辺の藪を刈り取ることで、ヒグマの潜伏や至近距離での遭遇を防ぐ効果が期待できます。羅臼町では春から夏にかけて町内会主導による草刈りが行われ、毎年多くの方が活動に参加しています。また、斜里町ウトロ地区では、地元ホテル「北こぶしリゾート」によるCSR活動「クマ活」を通して、ウトロ地区の草刈りなどの活動が行われています。ヒグマを町に近づけない環境を保ち、人とヒグマ双方の暮らしを守っていきけるよう、当財団が培ってきたノウハウを活かしながら、より一層地域との連携を深めていきたいと考えています。



## 05 利用調整地区

知床五湖は、年間約20万人以上が訪れる知床の主要な観光地です。一方で、利用者による植物の踏み荒らしやヒグマの出没による長期間の遊歩道閉鎖など、長年にわたりいくつかの課題も抱えている状況でした。これらの課題を解決するため、地元関係団体や行政は議論を重ね、国立公園を管轄する環境省は2011年より利用人数の調整等を行う利用調整地区制度を導入しました。現在、知床五湖は、電気柵が敷設され自由に散策できる高架木道と、レクチャーの受講が必須の地上遊歩道の二つの利用方法で運営されています。この取り組みの中で、当財団は、知床五湖フィールドハウスでの受付やレクチャー業務に加え、ヒグマが出没した際のパトロールなどの現地業務を担っています。



## 06 電気柵

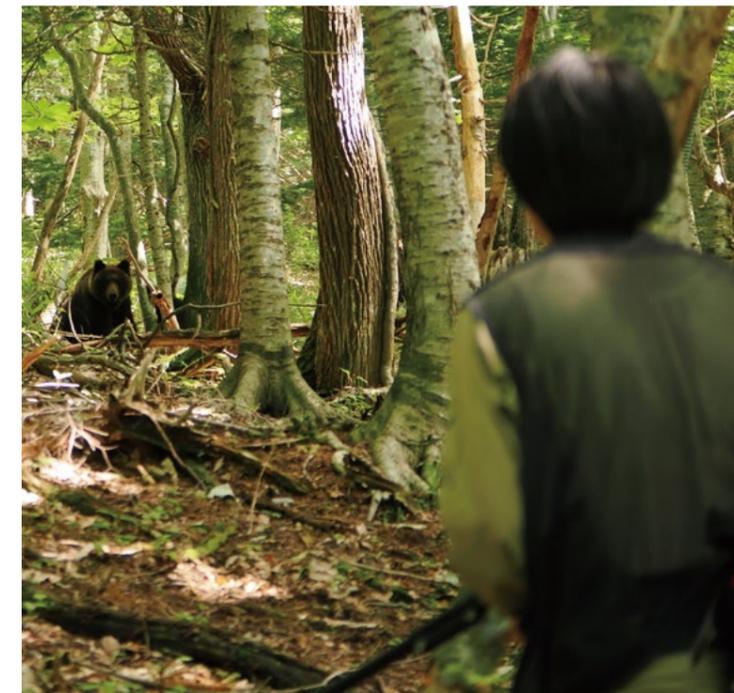
人の生活圏とヒグマの生息域が隣接する知床では、様々なヒグマ対策を行っています。そのひとつがヒグマの侵入を防ぐ電気柵です。雪が解けヒグマの活動が本格化する4月から電気柵を立ち上げ、その後も漏電防止のための草刈りなどの維持管理作業を定期的実施しています。電気柵は、ヒグマ対策の一番手として最も効果的な手法です。しかし、電気柵の張れない道路や川からのヒグマの侵入は防ぐことはできません。また、羅臼町のように住宅地や漁業施設が海岸沿いに30km以上も続いているような地域ではその全てを電気柵で守ることは現実的には困難です。

そのため、町内会による草刈りや地元学校でのヒグマ学習といったヒグマとの関わり方を地域課題として認識していただくための取り組みにも努めています。



## 07 追い払い・有害捕獲

ヒグマ対策において、該当個体に対してどのような対応を取るかは、ヒグマ管理計画で定められています。まず住民や観光客など人命の安全確保を第一とした上で、ゾーニングと行動段階フローに基づき、追い払いまたは有害捕獲など定められた手段を選択し、実行します。追い払いの場合、声掛けや手叩き、車のクラクション、轟音玉、時には銃器を使用しゴム弾や花火弾などを用いて、ヒグマが一時的にその場からいなくなるよう働きかけます。有害捕獲の場合は、基本的には銃器による捕殺が第一の手段です。その他、市街地内に潜伏したヒグマや夜間しか現れないヒグマなど銃器が使用できない状況の際は、箱わなを用いて捕獲を行います。



KEY WORD

### ゾーニングと行動段階

…ヒグマの出没場所と行動によって対応内容を決定

出没場所

+

ヒグマの行動

=

対応内容を決定

#### ▶ 出没場所の区分

- ゾーン1: 国立公園林内等
- ゾーン2: 山林や登山道
- ゾーン3: 小規模な集落や農地
- ゾーン4: 市街地とその周辺
- 特定管理地: 観光地・遊歩道

#### ▶ ヒグマの行動区分

- 段階0: 人を避ける。
- 段階1: 人を避けない。  
(段階1+: 段階1で、さらに行動改善が見られない個体。)
- 段階2: 人の活動に実害をもたらす。  
人為的食料を食べた個体。
- 段階3: 人につまよう・人を攻撃する。

第2期知床半島ヒグマ管理計画



釧路自然環境事務所  
北海道森林管理局  
北 海 道  
斜 里 町  
羅 臼 町  
檜 津 町

2022年4月



詳細はこちら <https://www.shiretoko.or.jp/higumanokoto/higuma/higuma5/>



## 調査

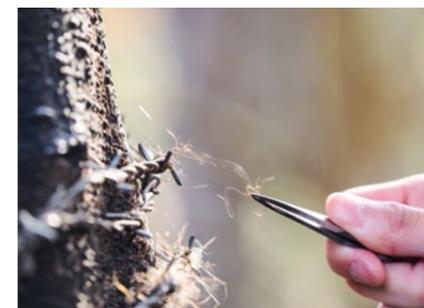
### 01 DNA 分析

ヒグマ管理計画に基づく各種の対策を行う中で、捕獲個体や痕跡から得られる個体識別情報は、効果的かつ適正にヒグマ管理を行っていく上で不可欠なデータです。その中でもとりわけ、ヒグマの遺伝子情報は重要であることから、ヒグマ対策の現場では必ず痕跡調査も行い、ヒグマの糞や毛が見つければ、そこから DNA 分析に用いるサンプルを採取しています。採取したサンプルは、北海道大学にて解析が行われ、個体識別されます。その結果、例えば、加工場に侵入したヒグマと捕獲したヒグマが果たして同一かどうかを DNA レベルで照合し、確認することが可能となります。



### 02 生息頭数

野生動物の個体数を知ることは、その動物の保護や管理を行う上で基本となる重要な指標となりますが、実際に把握することは容易なことではありません。知床では、2019 年から 3 年間かけて、東京農工大学・北海道立総合研究機構・北海道大学・知床財団の四者が、環境研究総合推進費のプロジェクトとして、ヒグマの個体数推定法の開発を行い、知床半島全域での生息数調査を実施しました。その結果、知床半島に生息するヒグマの推定生息頭数は「約 400~500 頭」であることが示されました。知床のヒグマの管理計画はこのような科学的な根拠をもって進められています。



ヒグマの毛を採取する様子

### 03 ハイマツ・ミズナラ

知床のヒグマにとって、ハイマツとミズナラの実がエサとして特に重要とされています。しかし、これらの実りは毎年必ず豊作を迎えるわけではなく、豊凶を繰り返すため、毎年その状況を把握するための豊凶調査が行われています。これらのエサの状況によっては、ヒグマの動きが大きく変わるため、調査自体は、木に成っている実の数を数えるという地道なものですが、とても大切な調査となっています。



ハイマツ



ミズナラ



最前線  
TOPIC

## 普及啓発活動

### 01 環境教育



当財団は地域の学校へ訪問し、ヒグマ授業を行っています。斜里町の学校では2000年から、羅臼町の学校では2007年から毎年継続して実施しています。授業ではヒグマ遭遇時の対処法やヒグマの生態を学ぶクイズなど、ヒグマについて楽しく、しっかり学びます。次世代を担う子供たちがヒグマの住む知床の豊かな自然を誇りに思い、人とヒグマが共存していけるよう、今後も引き続き取り組んでいきます。

### 02 広報物制作



知床への訪問者にヒグマやヒグマとの付き合い方を知っていただくこともヒグマ対策の一つです。ヒグマ学習教材トランクキットを普及するためのチラシをはじめ、「エサやり禁止ポストカード」、環境省主体で制作された「ディスタンスしおり」、自然公園法改正の啓発ポスターなど、訪問者へ向けた様々な広報物を制作しています。

### 03 ディスタンスカード



ヒグマとの適切な距離を知ってもらうための、「ディスタンスカード」を環境省主体のもと制作しました。カードの窓からヒグマのパネルをのぞくことで誰でも簡単にヒグマとの適切な距離を測ることができます。ヒグマと人間の距離が近いという課題を伝えるためのツールとしても使用され、知床の各所で配布されています。

### 04 B ☆ B



北海道日本ハムファイターズのマスコットである「B ☆ B (ビービー)」と一緒にヒグマと出会った時の「アウト」な行動を楽しく学べる動画コンテンツを制作しました。動画はYouTubeでの発信や各ビジターセンターでも活用されています。

～ B ☆ B が教える～  
ヒグマに出会ったときのスリーアウト  
<https://www.youtube.com/watch?v=mQtlgookvno>



### 05 クマ活



2020年より地域の企業を中心に草刈りを行う「クマ活」に取り組んでいます。草刈りは市街地周辺の見通しを良くすることでヒグマが街に近づきにくい環境を作り、地域の安全の確保を目指してすすめられている活動です。地域の方と共にクマ対策に取り組んでいることを心強く思っています。

### 06 機内アナウンス



2023年より日本航空(JAL)北海道支社の協力により、女満別空港到着の便でヒグマに関する普及啓発を目的とした機内アナウンスが始まりました。知床に来る前に知ってほしいマナーを事前にお知らせする非常に良い機会となっています。ご搭乗予定の方はぜひ機内で耳をかたむけてみてください。

## 私たちとヒグマのこれから

このような状況の中であっても、知床では、長年にわたり住民や観光客のヒグマによる人身事故は起きていません。これは、過去から積み上げられてきた様々なヒグマ対策の成果だけでなく、地域住民や関係者の皆さんの理解と協力に支えられてきたからこそといえます。しかし、ヒグマの出没に歯止めがかからない現在では、「何とか持ちこたえている」という表現が正しいかもしれません。

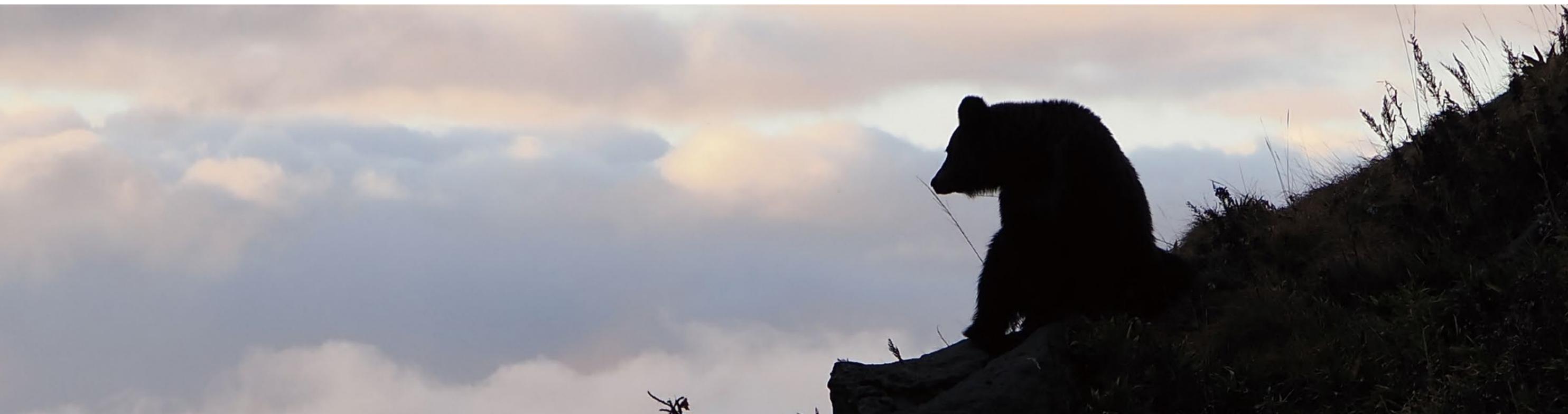
実際、これまでに人身事故が起きてもおかしくはない危険な場面や、現場で対応するハンターがヒグマに襲われてケガを負う事例が度々発生しています。こ

いったヒグマによる人身事故や被害を防ぐためには、対策を持続し、強化させていく必要があります。そして、そのためには資金と人材の確保が不可欠ですが、クマ対策に係る予算は、知床のみならず全国各地で不足しており、対策に関わる現場関係者の自助努力に依存しているのが実状です。こういった予算的な課題を改善しなければ、対策を現状以上に強化することや、現場を担う専門的な人材を安定的に確保し育成していくことも困難になるでしょう。加えて、持続的なクマ対策を進めていく上では、緊急時に迅速な対応が可能となるような法制度の見直しも必要です。地域社会の安全

につながるだけではなく、時に危険な状況でクマと対峙しなければならない現場対策を担う関係者の身の安全を守るため、これらを支える法制度の整備が急務です。

このような課題を抱えている地域は知床だけではありません。北海道や東北地方をはじめ、全国各地でクマによる人里付近への出没と人身被害が増加しています。このような近年の状況を受け、環境省はヒグマを含むクマ類を指定管理鳥獣（捕獲も含めた管理を必要とする対象動物）に追加し、曖昧になってきたクマ

と人との境界線を改めて引き直す姿勢を示しています。過去に大量出没を経験した知床も同様に、既存のヒグマ対策のあり方だけでなく「ヒグマとの向き合い方」自体も見直していかなければならない局面となっています。これまで行ってきた対策や普及啓発を一層推進させながらも、知床におけるヒグマの管理・対策の今後のあり方について今一度考え、ヒグマと折り合いの付けられる地域をつくることが、ヒグマ対策の先駆者である知床財団の責務だと考えています。



### <謝辞>

当財団のヒグマ対策へのご理解とご協力をいただいている地元、関係機関の皆様、ご支援をいただいている企業の皆様、この場を借りて御礼申し上げます。